

農山漁村の元気を作り出す若者と地域との交流と学び

山形県庄内町清川。最上川河畔に位置するこの町もいよいよ夏本番、川辺での遊びが楽しみな季節となった。

この地区では、今年 3 月に清川小学校が閉校し、代わって旧校舎には山形大学をはじめとする県内の大学や高等教育機関によって構成される「大学コンソーシアムやまがた」（以下「大学コンソ」）による「最上川学推進センター」が設置された。最上川の魅力は舟下り等で堪能できるそのダイナミックな自然景観もあるが、それだけではない。最上川とかわりながら生きてきた地元住民の生活文化、知恵、技術といった暮らしのスタイルに大きな魅力を感じるものだ。大学コンソは、こうした流域の農山漁村からの学びを通じて、文化の継承、自然の保全、地域づくりに役立つ教育や研究プログラムへ結び付けるべく、地元住民との連携を求めだしている。筆者も地元と大学の間を動きながら、まだまだ課題の残る地域と大学との連携のしくみ作りに走り回っている。

そんな動きの中、先日、学生組織である「最上川学サポーター」（以下「サポーター」）が結成された。サポーターの学生たちは現地での活動にかかわりながら、最上川学事業の高度化と新たな地域づくりや教育プログラムの開発のため試行実践を行っている。立ち上がって間もないが、これまで地元の農家での農業体験、舟運ガイド、羽黒古道の探索、川漁の体験実習、地域調査等に、地元の農家、またぎ、川漁師のおじさん、郷土料理に詳しいお母さんなどと共に現場の活動に取り組んできた。

それぞれの現場においては、最上川流域で里づくりや教育活動を行っている NPO 法人里の自然文化共育研究所が、大学・学生と地域の間に立って、時には困難な調整を行いながら、両者をつなぐ場を設け活動を展開している。最上川流域の自然や文化継承のためには、地元の活動を若者たちとどうつないでいくかということが大切だし、またその教育プログラム開発のためには学生たちやかかわる地域の方々の声や反応をどう形にしていくなかで、その積み重ねが重要だと考えるからだ。

学生サポーターだが、集まってくるメンバーを見て筆者にとって日々新たな発見がある。一番の驚きは学生たちのニーズの多様性である。現在 15 名ほどの学生たちが積極的な活動を展開しているが、農学部をはじめとして、教育学や文学関係の学部、理学部、医学部など様々だ。活動にかかわった動機も、流域の農業に関心がある、環境保全活動に関心がある、農山漁村のふるさと教育活動に興味がある、歴史を探りたい、地域医療の仕事を志している、新たな農業ビジネスの仕事をしたいなど、多種多様だ。だが何も学生たちが特別に卓越しているということではない。学生たちの魅力的となる最上川流域こそ様々な切り口からアプローチすることが可能な極めて懐の深いフィールドだと言えるのであり、それは何よりそこで日々暮らしている地域住民の豊かさと魅力であると言えるのだろうと思う。

一方、こんな魅力的な流域の農山漁村も近年の少子高齢化、経済低迷の中でその存続す

らも危ぶまれる集落が増えつつある。地域の元気をどう作り出していくかがき、担い手となるべき若者たちへと如何にしてつないでいくか苦悩している状況が続いている。

だから地域と若者たちの交流と学習の試みは、若者たちにとってはこれまでの範疇ではとらえられない新たな生き方の模索の機会を与えられたということができるともかもしれない。未熟だが元気のある若者たちと地域とのつながりを作り出し育てていくことが、農山漁村の新たな志を作り、元気を作り出していくことになるのではないかと期待している。